

尼崎市総合計画審議会 第2回市民・有識部会 議事録

日 時	令和7年6月30日（月）18:30～20:30
開催手法	対面およびオンラインの併用
出席委員	岩崎委員、潮委員、大江部会長、大永委員、重松委員、関（由）委員、原田委員、藤嶋委員、藤本委員、松原委員
欠席委員	小森委員、坂本委員
事務局	奥平政策部長、曾田都市政策課長、都市政策課職員

1. 開会

（部会長）

第2回市民・有識部会を始めます。事務局から出席委員と傍聴者の有無についてご報告をお願いします。

（事務局）

本日の出席委員は10名です。傍聴はございません。

（部会長）

本日の議事録確認委員ですが、本日の議題は「総合計画の点検」であり、各委員が幅広く、ご自身の体験や知識から、普段お感じになられていること、考えていることなどをコメントいただきます。

その際、全員で議論しますと、一人あたりの発言機会が少なくなり、活発な意見交換も難しくなりますので、今回は、2つのグループに分けて議論を進めていきたいと考えています。

テーブルに分かれて議論する予定ですので、特定の委員がすべての議論を把握することができません。そのため、今回の議論の内容を議事要旨としてまとめ、事務局から全員にお送りいただき、各自内容の確認をいただきたいと思います。

それでは、審議の内容に入っていきたいと思います。

本日の審議内容につきまして、事務局から説明をお願いします。

<事務局より資料説明>

【テーブルA】

【施策01 地域コミュニティ・学び】

- ・ 生成AIによる偽動画作成が容易になり、ネット情報の信頼性低下が懸念される。
- ・ 自宅の留守番電話やメールに届くフィッシング詐欺が増加しているように感じるため、高齢者の対応が不安。
- ・ SNSは利便性がある一方で、個人攻撃やいじめの温床になる事例もあるため、子どもが安易に利用しないためのモラル教育が重要。

- 市の HP で情報を更新しても「受け手がメリットを感じないと見てもらえない」と思う。会社でアプリ制作に携わったが、機能だけではあまり普及せず、逆に「ログインだけでポイントがもらえる」というようなメリットを感じてもらえる仕掛けがある方が、利用促進に成功している。堅苦しくせず、利用者が楽しめる仕掛けが必要。
- 部活動の地域クラブへの移行について、競技場など施設がさらに整備されれば、活動も進めやすくなると思う。活動の仕組みや拠点が整えば、保護者や地域住民も自然と協力しやすくなる。実際、少年野球やサッカーでは保護者が審判や応援に積極的に関わっている。
- ボランティア参加や保護者の協力が集まれば、活動の場はさらに広がる。学校だけに頼らず、地域全体で子どもを支える体制を作っていくことが重要。
- 地域クラブの継続運営には保護者ボランティアや地域の指導者が不可欠。いかにボランティアや指導者を確保していくかが課題。
- 女子野球などこれまであまり人が集まりにくかった競技種目などは、活動機会の拡大も期待される。一方で、吹奏楽など文化部は夜間や施設利用の難しさから移行に不安がある。
- 中学校の部活動がなくなって吹奏楽部がなくなると、アルカイクホールのような大きなホールを使う団体が減ってしまうのでは。せっかく良いホールがあるのに活用機会が減り、地域や文化の活性化にも影響が出るのでは。
- 中高生や社会人が参加する地域クラブがあることで、これまでの同世代だけの部活になじめず、部活をやめた子どもたちが新しい居場所として自分の才能を発揮できる場になるのではないかな。
- 尼崎には「結い」と呼ばれる助け合いの仕組みが残るが、自治会活動への住民の参加意識は低下し、支部長世代は「自分たちで終わるのでは」と不安を感じている。
- ある調査では、社会の課題に対し「自分たちで解決できる」と考える人は高齢層で多い一方、若い世代は「役所がやるもの」と思っている割合が高いことが分かっている。このように、市民社会への関心や理解の低さが課題だと感じる。
- 子ども食堂や地域の野球チームは物理的な居場所であると同時に、仲間とのつながりによる「心の居場所」としても機能している。
- SNS も居場所になり得るが、高齢者は利用しにくく、外出できない人の心の居場所をどう提供するかが課題。特に、ここ数年で居場所も多様化しているなかで、「家から出にくい高齢者の居場所をどう作るか」は課題と感じる。
- 「みんなの尼崎大学」では、学びのテーマと市民ニーズを組み合わせることで周知度や魅力が高まるのでは。ただ待つのではなく、どんなニーズがあるか自ら情報を取りに行く姿勢も必要。
- 若い世代は図書館よりタブレットで情報を得るのが一般的となっており、デジタルを活用した文化発信の新しい手段として検討の余地がある。

【施策2 人権尊重・多文化共生】

- 以前は「人権尊重」「多文化共生」を建前で語る風潮が強かったが、近年は SNS 上で本音がむき出しにされ、他人を傷つける発言や価値観否定が目立っている。その背景には「自分は大事にされていない」という実感や苛立ち、自己肯定感の低下が影響しているのでは。
- 外国人労働者の増加で多文化共生が進む一方、言語の壁や文化習慣の違いから意思疎通に困る場面もあり、日本のルールや文化を理解してもらうこと、そして私たち日本人も相手を理解しようとする姿勢が大切。
- これまで保たれてきた性別の役割分担が問題視され、マイノリティへの配慮が進んだ結果、今度は配慮が行き過ぎて逆に性別役割をはっきり言いにくくなっている。
- SNS では匿名性から激しい意見衝突が頻発し、偏った意見が増える中で、特に若い世代は情報に影響を受けやすいため、実際に会って話すことがとても大切。
- 外国籍や LGBT の人にも当てはまり、直接会って話すことで初めて理解が進むため「対話の場」が必要と感じる。SNS のやり取りでは見えにくい「思いやり」や「配慮の気持ち」を取り戻すことが大切。
- これからは「社会の人との対話」がとても大事。対話を通じてお互いの考えを理解し合う社会を作ることが必要で、そうした考え方を計画に取り入れることが大きな課題と感じる。
- 今の社会では「道徳心」が不足していると感じる。特に、SNS の環境では、人は簡単に好きなことを言ってしまう。そうした言動を止めるためには、やはり「道徳心」が大切だと思う。
- 子どもの頃から多文化共生や人権意識を伝えることが、社会全体の意識の底上げに有効と思う。子どもはまだ知識や経験がない分、価値観をしっかり伝えれば、大人になった時に自然と意識を持てると思う
- 子どもが発信する言葉は、大人にとっても受け入れやすく、身近な子どもから言われる方が心に響くことが多い。教育現場や家庭で価値観を子どもに根気よく伝え、価値観の変化を促すことが有効。
- 尼崎では外国人住民が近年急増し、人口増加の要因ともなっているとテレビ番組で知った。市役所では4か国語でゴミ分別を案内するなど多言語対応を整備し、全国的にも注目を集めている。こうした取組や人口の増加はまちの活性化にもつながるため、積極的に PR してもよいのでは。
- 一方で、宗教上の習慣が異なる人が増えると、外国人労働者を受け入れる企業としては、礼拝スペースの確保など受け入れるための具体的な対応が課題になる。
- 家賃が比較的の安い地域に外国人が集中する傾向があると聞いたことがあり、治安や住環境を不安視する声も出ている。空き家対策やニューカマー・オールドカマーで状況が異なるため、それぞれに合った対策が必要。
- 管理職や組織運営における男女格差に課題がある。若い世代には残業手当が出ない管理職を目指したがない傾向もあり、結果的に女性活躍の場がさらに広がらない現状がある。市を含め

た、社会全体での意識改革が必要。

- マイノリティへの配慮は、LGBTQの方だけでなく、宗教的なマイノリティの方にも配慮が必要

【施策3 学校教育】

- 「体罰」という言葉は、実際には暴行罪に当たる行為であり、正当化してしまう表現ではないか。飲酒運転が一発で免職となるように、体罰も厳罰化しなければ問題は根絶できない。
- 不登校の背景には発達障害や精神的問題、家庭でのネグレクトやヤングケアラーなど多様な事情があるため、個別に応じた支援が必要。
- 小学校プールの老朽化により、サンシビックまで徒歩で通う子どもがおり、猛暑の中で子どもへの負担が大きいと感じる。
- 40度を超える暑さが想定される気候変動下で、空調だけで教育環境を守れるのか疑問。これからの教育環境を考えたときに、気候変動に対して先を見越した対策が必要。

【施策4 子ども・子育て】

- 子育て支援では、社会福祉協議会が訪問型の「ホームスタート」事業や「ファミリーサポート」を展開し、孤立しがちな親を地域で支えている。親として「どうしていいかわからないまま子育てに直面する」ケースが多く、ワンオペ育児になり、そこから虐待につながる恐れもあるため、このような親をサポートする取組も大切。
- 尼崎市では子ども食堂や高齢者食堂が運営され、高校生など若者も支援に参加することで、高齢者には交流や生活支援を、若者には働く目的や居場所を提供し、世代を超えた支援の輪が広がっている。
- 子ども食堂への寄付をしやすくする取り組みとして、チケット制の寄付を集めている事例があると聞いたことがある。1食500円のチケットを寄付者が購入し、そのチケットで子どもたちが食事をするという取組。このような寄付を受けやすい工夫ができると面白い。
- 子ども食堂は「貧しい子だけ」というイメージを避けるため誰でも利用可能にしているが、その結果ターゲットがあいまいになったと感じる。一方で、朝食をとれず登校する子どもも多く、神戸市中央区では募金を活用して子ども食堂に支援を始めている。
- 支援の対象を絞るべきか、誰でも利用できる場とするかで意見が分かれるが、実際には地域の高齢者がボランティアや利用者として関わり、世代を超えた居場所づくりの機能も果たしている。
- 保育支援の一環として子ども家庭センターが設置されているが、相談に一步踏み出すのは勇気がいるため、もっと相談しやすい環境や門戸を広げる工夫が必要。ただやっていますというだけでなく、ついで行けるようにしたり、ネットを活用したり利用しやすい支援の仕組みづくりが大切。
- 市や産婦人科では妊婦の集いを通じて出産準備を学べるが、産後は孤独感や産後うつに悩む人も多い。保健師の家庭訪問で支えられた事例もあり、産前より少ない産後サポートをどう拡充す

るかが大切。

【施策5 地域福祉／施策6 障害者支援／策7 高齢者支援】

- 分野を横断して支援するために重層的支援体制が始まったが、これをどう拡充していくかや、縦割りの壁をどう乗り越えていくかが大きなポイント。
- 尼崎は生活困窮者が多い地域という特徴があるので、「子育てしやすい街」といったプラス面をアピールするだけでなく、福祉の本来の役割である生きづらさを減らす視点が重要。
- 利用者増の背景には発達障害認知の広がりがあるが、実際には親子の愛着形成が不十分であるケースも多い。愛着関係がしっかり結ばれることで、子どもが健やかに育つことにつながるのではないかと思う。妊産婦時期のケアや保護者支援が欠かせないと感じる。
- 高齢者支援で今後課題になるのは終活支援。一人暮らし高齢者の身元保証人不在や、認知症の方の入院手続き、死後の住居処理などで行政・社協が苦慮している。
- 高齢化が進む中で認知症などにより自分の意思で判断できなくなる方が増えている。成年後見制度があるが、なかなか制度の利用までにはハードルが高い。
- ボランティアが代理人になる市民後見制度もあるが限界があり、大変なケースは弁護士や司法書士、行政や社協が対応しており、このような場合は市民だけに任せるのは難しいと感じる。一方で、対策を進めない限り困っている人がそのままになってしまうのではないか。

（健康寿命と働き方）

- 「高齢者＝65 歳以上」という概念が変化し、70 歳でも働く人は全国の3割強に達すると聞く。ある企業では継続雇用を70歳に延長し、人間ドックを会社負担で実施や、介護・通院しながら無理なく働けるよう短時間勤務を認める工夫などを行っている。
- 急に働くことがなくなると、脳の老化を招くため、柔軟に働き続ける場の整備は、健康維持に直結するだけでなく、人材不足解消にもつながるため重要。

（外国籍市民への支援）

- 外国籍の高齢者や障害を持つ方が増える中、制度の複雑さや言語の壁が大きな課題。専門用語は日本人でも分かりにくく、外国籍の方にも分かりやすい情報提供が必要。
- 外国人総合相談センターを設置し、多言語相談や同行支援を行っているが、こうした取組を広げ、気軽に相談できる環境整備が重要。

【チームB】

【施策1 地域コミュニティ・学び】

- SNSの頻繁な更新は注目を集めやすく、写真付きの投稿は雰囲気伝わりやすい。最近はショート動画での発信が効果的で、流行の音源や表現を取り入れると若者の関心を引きやすいと思う。
- 選挙でのSNSの活用が話題になっているが、高齢者は特に情報についていけない方が多い

ように思う。

- 学生は市外の学校へ通い、その後アルバイトをしてそのまま帰宅する人が多く、地域と関わる人とそうでない人の差が大きいと感じる。
- 学生として行ける場所がよく分からず、地域イベントは情報が届いていないことが多い。気づいたらイベントが終わっていて、教えてくれる人がいないので参加できていない。
- 高齢化地域では子ども会や社協活動の参加が減少し、特定の人で長年支える状況があると思う。周囲では活動自体が消える例もあるが、祭りや神輿を細々と続けているところもあり、市のサポートがもっとあればと思う。
- だんじりや神輿の面白さを子どもたちと共有すると、子どもたちが興味をもって協力しようという雰囲気になってくれた。子どもたちが友達を誘って自分たちで参加してくれると、地域も活性化すると思う。
- 地域の生涯学習プラザでは月 1 回集まり、悩み相談やアイデア共有が行われている。役所関係の人同士になりがちなので、市民が気軽に意見を交わせる場になればいいと思う。
- 子ども食堂の運営に携わっていると、親御さんから「大人も利用できる場があればいい」という声を聴いている。
- 子どもが自分の住んでいる地域の良さ触れる機会が少ないと感じている。自治会の活動では、街歩きやお祭りのような地域の体験が十分に伝えられていないと思う。
- 図書館や博物館、公文書館などの施設が一体的に連携できておらず、工夫がまだ必要だと思う。
- 部活動の地域移行についても、文化部や吹奏楽部は難しく、地域クラブでの受け入れに課題がある。
- 美術館では「静かに」「触らない」といった制約が多く、文化を楽しむにくい。A-labo のように、子どもたちが絵や文化を身近に感じられる機会をつくり、自信を持てるようになってほしい。
- まちに学びを広げるという点でサマセミは参加のハードルが低く良いと思う。サマセミ以外にも同じような雰囲気の取組があるといいと思う。
- スポーツの話題では、従来の競技種目だけでなく、スケートボードやダンスなど新しいスポーツを取り入れてほしい。
- 尼崎にスケボーパークが整備されたのは、先端的で周囲に自慢したくなると思った。

【施策 2 人権尊重・多文化共生】

- 大学の共学化でメディアに注目されることが多いが、現在は女子の進学率も高くなっており、昔のように学ぶ場の不足は解消されつつある中で、状況は変わってきていると感じている。これからは外国人の方も含め、地域や社会で一緒に作り上げていくことを考えていく必要がある。
- 外国人との相互理解には、まずは話すことから始める必要があると思うが、日本人は英語が苦手

で意思疎通が難しくなりがち。また、日本ではフリーWi-Fiが少なく、外国人との相互のコミュニケーションを助けるために近くにWi-Fiがあるといいと思う。

- 育休取得は進みつつあり、1～2 か月取る男性も増えたが、昇進への影響を不安視する声もあると思う。
- 社会全体が「育休は当たり前」と認識することで、女性だけに負担を偏らせず、働き方改革につながる。
- 人権は誰もが持つもののはずだが、人権の研修などでは、特定のテーマの人権に限定されがちで、どこか自分には関係ないと捉えられてしまっていると思う。人権そのものを広く知ることも大事。
- ネットでは匿名になることで、相手に向けた言葉とは思えない発言が多く飛び交い、目の前の人に本当に言えるのか疑問に思う。
- SNSの利用については大人も子どもも、もっと学ぶ必要があると思う。大人も理解不足でいじめや人権侵害につながる使い方がある。むしろ高齢層が教育を受けないまま利用し、炎上や誤用を起こす例が多いイメージがある。
- 外国籍の方が多い地域では事故や犯罪の話を耳にすることがあり、子どもたちが学校に安心して通えなくなることがないように配慮や対策が必要。
- 外国籍の方が増えていると聞くと、飲食店やコンビニで多く見かけるものの、普段はあまり接点がない。
- 同性パートナーシップ制度は導入されたが認知度は低く、日本全体でこうした制度が整っていないと感じる。
- 特別支援学校の子どもが高校へ進学する場合、阪神特別支援学校か勉強して進学するしか尼崎にはなく、大阪には障害のある子が高校に進学できる特別枠があると聞くので、導入してほしい。

【施策3 学校教育／施策4 子ども・子育て支援】

- 人員不足により、教員の負担は増え続けており、給与を上げて優秀人材を確保しなければ、働き方改革もうまく進まないのではないかと。
- 今の大学生は端末で学習してきた世代だが、学校や幼稚園、保育所は依然として紙文化が強く、実習ノートや未だに手書きで求められるなどデジタル化が進んでいない場合がある。
- 学生はキーボード入力が苦手で、スマホのフリック入力でレポートを書く事例もある。一方、小学生ではタイピング練習ゲームなどを通して楽しみながら取り組み能力を伸ばしており、世代間でリテラシーの格差がある。
- 子育て中の母親からには「習い事に通わせたいが経済的に難しい」という声をよく聴いている。親が働こうとしても、資格やスキルがなく働きに出にくい現状があり、復職のため短時間で学べ

る講座や情報共有の場が必要。職業訓練学校は時間的な拘束があり、もっと柔軟に受けられる環境があればよい。

- 親が就職しようと考えても、子どもの預け先に悩む家庭は多いと思う。会社側もお母さんもお互いに柔軟に働くことができる環境になればよいと思う。
- 乳児期には保健師による訪問支援があるが、1歳を過ぎる訪問はなくなり、気軽に話を聞いてくれる存在がなくなる。必要なひとには継続的な訪問支援があると思うが、そうでない人でも相談したいことはたくさんあると思うので、気軽に相談できる人がいてくれたらと思う。
- 特別支援の子どもを受け入れられる幼稚園がもっと増えてほしい。特別支援児の枠が埋まり、幼稚園に通えずに民間デイサービスが受け皿となった事例があり、本来の希望はかなえられず、選択肢が限られているつらさがある。
- 特別支援の子どもは一般の子どもが受ける主要教科のテストを受けられず、副教科のみ実施されるなどの事例があり、評価の機会そのものが閉ざされてしまうことは課題に感じる。
- 子どもや若者の意見をオンラインで集める「子ども・若者ボイスアクション」という新しい取り組みが尼崎で始まっている。まだ学校現場には導入されていないが、学校端末を通じて地域とつながれば有効と思う。
- スケボーパークなど若者を応援する動きがありいいことだと思うが、利用者層が限られ、まち全体の若者に広げる方法が課題と思う。
- ユースセンターなどの公的な支援の場に馴染めない若者の居場所づくりを民間団体と取り組むことが出来ればよいと思う。
- 妊娠や出産に関する正しい知識を若いうちから学ぶ「プレコンセプションケア」は重要だと思う。多くの大人は十分な知識を得ないまま育ってきており、将来の妊娠・出産を考える前段階で学べる機会があると良い。

【施策5 地域福祉／施策6 障害者支援／施策7 高齢者支援】

- 高齢者が小学生の登校見守りを「仕事」として担えば、子どもから元気をもらえ、親も休暇を取らずに安心して働けると思う。実際に地域のイベントで高齢者が昔遊びを教えた際、子どもたちは大いに楽しみ、世代間の交流が互いにとても有意義であった。地域で高齢者が役割を持てる仕組みづくりは、福祉と子育て支援を同時に進める可能性がある。
- ひきこもりは長期化して高齢化すると大変と思うが、近年は家にいながら働ける仕組みもあり、必ずしも悪いことといえないのではないかな。従来の「ひきこもり」の定義を見直す必要があるのでは。生活様式が変化する中で、社会とのつながり方を柔軟に考える必要がある。
- 発達特性がある子どもや大学生が増えてきているので、その特性について理解を深める学びの場がもっと必要だと感じる。

- 障害のある人には特に、地域の理解がとても必要だと思います。発達障害の子は見た目ではわからないことが多く、誤解が生まれやすいが、例えば「笑わない」と誤解されていた子も「話すのが苦手」と伝えるだけで理解が深まり、周りの受け止めが変わる。理解してもらうには時間がかかるが、少しずつ工夫して理解を広げることが大切。
- 発達障害や認知症を「言葉」では知っていても実際の様子は伝わりにくいため、どう接したらいいのかを学ぶ機会や理解を深める場面も必要。
- ヤングケアラーといわれる本人たちは「自分がケアしている」という自覚が薄く、後になって初めて気づく場合も多い。ケアをする人自身を支える仕組みが大切だと思う。
- 介護の学びに関しても、資格取得に多額の費用がかかる現状があり、比較的安価な学習機会もあるが知られていないことが多い。介護を学ぶ人材を増やすために、もっと学びやすくしたり、負担を減らしたりできればいいと思う。
- 先日親族が亡くなった際に、葬儀や必要な手続きを事前に知っていれば負担が減っていたと思う。認知症の場合は家族の言うことを聞かない場合が多く、第三者からの声掛けやサポートが必要と感じる。
- 放課後デイについては、子どもだけでなく親への支援が必要だと感じる。子どもは元気に帰宅しても、保護者が「疲れた」と感じる場合があり、親の話をよく聞くことが本当に大事だと毎日感じる。
- 児童養護施設に関わっている人の話では、子どもたちが後ろめたい気持ちを抱いている場合が多いと聞く。親御さんのケアも必要であるし、子どもたちが前向きに挑戦したいと思えるような機会やイベントがもっと広がればいいと思う。
- 歩道や建物の傾斜でベビーカーや車いすが通りにくいところがある。障害者にやさしいまちづくりはハード面も大事と感じる。
- 「高齢者食堂」やコミュニティナース活動など、高齢者が気軽に参加できる拠点は生きがいのづくりや孤立防止につながる。地域に根づいた多様な居場所づくりが今後重要と思う。

以 上